

昭和の小さな物語

終わりの章

昭和への賛歌と郷愁

カンボジアで見た幼い姉弟に思う

トシオは、現役の時、自動車を取り巻く諸事情を調査するため会社の欧州視察団に参加し、各地を巡り歩いた。

じかに接した異国の人や文化は、どれもが新鮮で、物珍しかったが、仕事のためだったので、ゆっくり見て回る暇が無かった。

その穴埋めと言う訳ではないが、会社を定年退職すると、妻を伴って世界の国々を旅して歩いた。

ヨーロッパやアメリカにもそれなりの良さを感じだが、親近感と言う点では今一つのものがあった。

その一方、東南アジアの国々を訪れた時は、人々の暮らしの中に、幼いころの日本・・・昭和を見出して懐かしさでいっぱいになることがしばしばあった。

・・・五、六歳になる女の子が、赤ん坊を抱き、つきまとう二、三歳の男の子の面倒を見ていた。女の子と男の子は粗末だが衣服を身につけていたが、赤ん坊は襁褓をオムツに当てているだけで何も着ていなかった。

もちろん、上の二人は裸足だった。自分だってまだ親に甘えていたい年端もいれない幼児が、むずかる乳飲み子をあやしなながら、自分と幾つも年の違わない弟を遊ばせている。

何年か前にカンボジアを旅した時に見かけた光景だが、古希を過ぎた人の中には、彼女と同じような体験をした人がいっぱいいるはずだ。

カンボジアの子供たち



経済が高度成長を遂げる前は、日本の子供たちも苦しい親の生活を少しでも

手助けしようとして、女の子は母親の炊事洗濯や育児の手伝いをした。男の子も薪割りや水汲みを手伝ったし、子守もした。留守番や使いはもっぱら子供の仕事だった。とにかく昔は子供に出来る仕事はたくさんあったし、子供もよく働いた。家族が力を合わせなければ生活できなかつた、と言う必然性はあつたのだが、親は子を思い、子は親を助けようとした。

戦後の日本は極貧に喘いでいた。それでも人々には明日への希望があり、誰にも親兄弟や他人を思いやる優しい心があつた。戦火で家を焼かれてしまった当時の日本人は、瓦礫の中で空腹に耐えながら国土再建に励んだ。その甲斐あつて世界屈指の経済大国を築くことができた。しかし、一方で失ってしまったものも多い。思いやりとか謙虚とか美徳などの言葉は、いつの間にか死語になり、経済至上主義、拝金主義が蔓延し、金はたっぷり持っているが、心の干からびた人が世の中を牛耳るようになってしまったのは残念だ。

人間の欲望には限りが無い。豊かになればなつたなりに、さらなる豊かさを求めて止まることを知らない。先進国と呼ばれるリッチな国々は、いつの間にか経済に偏向したいびつで過度な競争社会を作り出し、首までどっぷり浸かつてそこから抜け出せなくなつてしまった。

数年前に旅をした頃のインドシナ半島の国々の人々の暮らしぶりは、この物語の中に書き綴つてきた戦後の日本に酷似していた。良きにつけ悪きにつけ歴史は繰り返される。やがてはこれらの国も、資源を濫費する飽食社会に行き着くのかと思うと、寂しくなつてしまう。

昭和の小さな物語 完